# 自分道（じぶんみち）

下地（しもじ）　希星（きらり）

朝六時三十分。アラームの音に叩き起こされて今日が始まる。鉛(なまり)のような身体に鞭(むち)を打ち、なんとか机に向かう。受験生の日々はつらい。土曜日であっても、休んでいる暇などない。毎日、朝から晩まで勉強に追われる。

私は、高校三年生。父は医者、母は薬剤師というエリート一家に生まれた。六つ離れた兄は東大医学部を卒業し、現在は東大病院で働いている。四つ離れた弟も医者を目指して慶応義塾(けいおうぎじゅく)大学附属(ふぞく)中学に通っている。いわゆる、サラブレットだ。私はというと、とっくに勉強は諦(あきら)め、近所の公立高校に通っている。諦めた、とはいってもそれなりの学力はある。勉強しなければ親に怒られるから一応、勉強はしてきたつもりだ。将来の夢は、特にない。将来は医者だとか薬剤師だとか周囲から期待されているが、私は医療系には全く興味がない。生きていける程度に働ければいいと思っている。

どこに行っても、「受験生」という言葉が

ついてくる。大学は、親に「慶応を目指しなさい」と言われているため、最近本格的に勉強を始めた。いろいろ考えた結果、一般入試で挑戦することを決めた。とは言っても、ライバルは皆、中学の頃から将来を見据えて勉強してきただろう。私は現在D判定。手の届かないレベルではないが、高三の五月から勉強を始めて合格できるとは思えない。実を言うと、第一志望に合格する気もあまりない。あくまで目標、という感じだ。波に乗って、というか流れ的に医学部を志望しているが、勉強はもうしたくないし。そもそも、兄や弟とは頭のつくりが違うから期待しないでほしい。

私は、幼い頃から兄と比べられてきた。兄はテストで百点を取るのは当たり前、成績もオール5で優秀。わたしが、テストで九十五点でも「百点以外は〇点と一緒」と言われ褒められた記憶はない。弟も兄同様、成績優秀、周囲からの期待を裏切らなかった。「なんで

あんたはいつもこうなの」と言われることもあったが、私だって知りたいと思っていた。兄や弟に劣る自分に悔しくなって精一杯努力したこともあるが、やっぱり勝てなかった。そのときに私は「ああ、きっと私だけ頭のつくりが違うんだろうな」と悟った。それから勉強嫌いになり、今に至る。

嫌々ながら、英単語の暗記に入る。時刻は朝九時。起床からわずか二時間程度しか経っていないことに絶望を感じる。今日は、十時から塾。毎週土曜日はテストがあるから、少しでも勉強しないと本当にやばい。点数が悪いと親に伝えられる。「親の顔に泥を塗るな」と怒られるのは目に見えているからこちらも必死だ。私は、中学生の頃はなんとか親を説得し、塾には通っていなかった。しかし、高校生になって強制的に入塾。こうなると、もう勉強からは逃れられない。

受験の天王山といわれる夏休み、貴重な勉強時間を削って、第二志望、九州大学のオー

プンキャンパスに参加する。去年のうちに行っておけばよかった話だが、去年の今頃は大学のことなど微塵も気にしていなかったから仕方がない。それよりも、去年までそこら辺の私大の経済学部にでも行こうかと思っていた私が、九大のオープンキャンに参加するだけでも称賛してほしい。まあ、これも半ば呆れ気味に親に言われて、渋々参加することにしただけだが。九大は国公立だが、私大の慶応には偏差値で劣る。私は正直、偏差値など気にしていないが、両親はどうしても慶応推しだ。自分たちの母校だからというのもあるだろう。頭がいいのは、ある意味こわい。私は、自分の子どもに過干渉する親には絶対になりたくない。

あっという間に八月になってしまった。蝉の声が受験生を焦らす。五月から着実に学力は上がっているが、判定に変化はなし。今日は、九大のオープンキャンパスのために久々に飛行機に乗る。よく考えてみると、飛行機

に乗るのは中三の修学旅行以来だ。両親の仕事もあり、どこかへ出かけることはめったにない。ましてや、家族旅行など私が幼い頃に一度行ったきりだ。ちなみに今日も両親は仕事だから、祖母と来ている。祖母は元看護師で、こちらも医療系。

空港は昔から好きだ。なんか、新しい世界が広がっている気がしてワクワクする。いよいよだ。

「ご搭乗(とうじょう)ありがとうございます。お足もとにお気を付けくださいませ」

キャビンアテンダントはいつ見ても美しい。気遣(づか)いやおもてなし、笑顔まで完璧だ。出来れば機内から降りたくない。降りると現実に引き戻されるから。

東京から約二時間のフライトは快適だった。塾の課題を進めるつもりだったが、爆睡(ばくすい)をかましてしまった。

「ご搭乗ありがとうございました。お気を付けくださいませ」

飛行機を降りてもあのキャビンアテンダントの姿が脳裏にちらつく。今まであまり注目して来なかったが、キャビンアテンダントは人を笑顔にする力を持っていて、美しくかっこよかった。何かに、こんなに興味を惹かれるのは初めてだ。夢を見つけてしまったかもしれない。

私は、オープンキャンパスに参加し、夢を見つけて帰ってきた。正確に言うと、オーキャンに向かう過程でこれだと思える仕事に出会った。しかし、医学部を目指している私がいまさら「キャビンアテンダントになりたい」と言ったところで両親には猛反対されることだろう。来世の仕事にでも取っておこうか。いやいや、自分の人生を自分で決めないでどうする。考えれば考えるほどわけがわからなくなっていく。葛藤した挙句、進路を変えることを決意した。問題はいつ親に話すか。タイミングを逃すと終わりだから、こういうのはできるだけ早めがいい。明日、意を決し

て話してみよう。誰が何を言おうと夢は固まっている。

今日は人生の大一番だと言っても過言(かごん)ではない。緊張で昨晩は寝ることができなかった。たかが親に話すだけだが、全然余裕はない。両親が帰ってくる夜に言おうと思っているから、残り時間は十二時間だ。

午後七時。親が帰ってきた。いよいよだ。深呼吸をして口を開く。

「お母さん、私、キャビンアテンダントになることにした」

もちろん、母は唖然(あぜん)としている。化け物でも見たかのようだ。

「どういうことなの。いまさら。いつもいつも期待を裏切らないでちょうだい」

「そうだ。現実を見なさい。親の顔に泥を塗るような真似はやめなさい」

お母さんに続いてお父さんも言う。まあ、こうなるのは承知だ。

「もう決めたから。考えると、今まで自分の

ために生きてなかったな、と思って。自分の人生は自分で決めるから、もう干渉してこないで」

「わかった。好きにしなさい。お父さんもお母さんももう知らないからな。がっかりだよ」

強く言い過ぎただろうか。だけど、これぐらい言わないと引き下がることはないだろう。よく言えた、自分。話した後は、希望に満ち溢(あふ)れていた。どうしても夢を叶(かな)えなければ。

あれから約半年が経った今日、二月二十六日。日本航空大学の合格発表がインターネット上で行われる。自信は割とあるが、油断はできない。夏休みに進路変更をしてから、私は一層勉強に熱が入った。夢を叶えるための勉強は楽しかった。合格発表は午前九時。残り五分だ。ホームページを開く手が震えるほど緊張している。

「三七五、三七六、三七八、三七九あった！」

私の受験番号三七九が確かにある。人生で一番の達成感があった。やっと自分の道が開

けた気がした。あんなに猛反対していた両親も今となっては私の夢を応援してくれている。

四月からキャビンアテンダントになるための新しい生活が始まるのだ。楽しみで仕方がない。ようやく切り開いた「自分道（じぶんみち）」に踏み出す第一歩だ。私の目は、希望に満ちた未来を見据えていた。